（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　三山　美緒子

三山美緒子氏の論文 *Some Aspects of Disjunction Constructions and Alternative Questions in English and Japanese*（和訳「日英語における選言構造と選択疑問文の諸相」）は、英語と日本語における選言表現が関わる構造を比較しつつ、以前の研究からその意味解釈に関与が指摘されていた選択関数が構造上どのような位置づけを与えられるべきなのかを詳細に論じたものである。英語と日本語を比べることで、疑問文における選言表現の存在が自動的に選択疑問文の解釈を可能にするのではないことを立証したのは、比較研究が個別言語の文法メカニズムについての重要な知見をもたらすことを強く印象づけるものである。また、先行研究では断片的にしか選言表現の意味解釈における役割が認知されていなかった選択関数による分析の有効性を確立した点も、本論文の大きな貢献である。

第１章でその選択関数の提案を含む先行研究を概観したのち、第２章では部分構造との類似点を綿密に検討して日本語についての統語分析の基礎を築き、その上で第３章では統語構造から得られる意味解釈のメカニズムを提示、第４章で日英語の比較を行う、という全体構成になっている。この中では、第２章に最も多くの紙数が費やされる。英語からの類推だけにたよった先行研究では見落とされていた日本語の選言表現の特徴として、「どっち（か）」とともに主名詞が出現するという事実に着目し、基本的には、部分構造が関わっていることを示した点は、選言表現についての理解を正しい方向に大きく転換させるものとして高く評価される。主名詞を含む限定詞句自体の分析に関しても興味深い研究領域が開発され、今後の研究に良い刺激を与える結果となっている。

第３章では、「どっち」の導入する選択関数が、全体に対する部分を意味する構造をもつ選言表現の解釈上の本質であると提案する。選言表現を含まない部分構造との違いがそこに生じてくることになるのだが、選言表現がおおよその点では部分表現と似ていても構造上全く同一というわけではないという第２章の分析結果を受けて、意味解釈のメカニズムの違いは正当化できると論じている。

第４章の日英語の比較は、選言表現についての共通項と相違点をあぶり出す。意味的には英語においても選択関数が関わっているものの、選択関数を導入する *either* が日本語の「どっち」とは統語上異なり、名詞に付随するものではないことから、削除分析と合わせて日本語には見られない構造パターンが英語で可能になっていることを解き明かした。

課題としては、日本語の節レベルの選言構造も名詞的表現に回収できるとしながら詳しく分析していないことがあげられるが、本論文は、これまであまり研究蓄積のなかった日本語の選言表現に対する理解を大きく前進させたものと評価される。また、その理解が英語の分析においても有効であることを示したことは、普遍文法において選言表現がどのような形で与えられるかについての有力な仮説を提出したことになり、英語だけを取り上げた研究とは一線を画している。以上、博士（文学）の学位に値すると判断する。